

# 適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、4 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立白鷗高等学校附属中学校

1

次の資料を読んで、あとの問題に答えなさい。

(丸で囲んだ数字がついている言葉には資料のあとに〔注〕があります。)

資料A

環境はさまざまです。地球には① 熱帯から② 寒帯まで、いろいろな温度環境がありますし、生物が生きていくには水が必要ですが、水環境も、極端に乾燥した砂漠から、まわりが水だらけの湖や海までさまざまです。

一本の木だって多様な環境を提供します。根っここのまわり、幹のなか、葉っぱの上では、環境が異なります。葉と言っても、こずえの先端の葉と根元の葉では環境は違つてでしょう。葉の表と裏でも大違いです。木は丈が高く枝も茂り、さまざまな生息環境を動物に提供します。葉が茂っているので隠れやすく、幹の中に潜り込んで隠れることもできます。安全な住みかとなるのです。そして木は長命ですから住みかとして安定しています。つまり木は安全で安定したたくさんの住みかを提供してくれるのですが、その上、葉、果実、蜜、花粉、樹液と、さまざまな形の食物をも提供してくれます。そこで一本の木には多くの動物が住むことになり、だからこそ植物の種数より動物の種数がずっと多くなるのです。一本の木でもそうなのです。木にはさまざまな種類がありますから、それらを利用する動物もものすごくたくさん出てくることになります。

もちろん環境がいろいろあると言っても、どの環境にも生物が住めるわけではありません。水がまったくなければ生物は住めませんし、極端に高い温度や低い温度環境にも住めません。生物が利用できる環境は限られています。環境の種類に限りがあるなら、それらに適応した生物の種の数にも限りが出てくるだろうということになりそうですが、そう簡単にはいかないところが生物の生物たるところです。

生物には歴史があります。そして生物多様性にも歴史があります。人間の歴史でもそうですが、歴史は同じことが繰り返されないう一回きりのできごとの連続です。③ 大絶滅が起こった後、絶滅した種が復活したわけではありません。一回きりとは、かけがえがないことを意味しています。

生物はまた「ご当地主義」です。多くの種は、きわめて狭い地域に分布が限られており、他の場所には住んでいません。そこ以外には住んでいないということは、そこがだめになったらもう代わりがないのですから、その生物にとってのご当地はかけがえのないものです。地球上のほとんどの場所が、そこに住む生物たちにとってのご当地です。だから、すべての場所がかけがえのない場所たということになりますね。このように生物とは、一回きり・その地域限定であり、二重にかけがえのないとても大切なものなのです。

ところが科学において、ここのご当地が問題となるのですね。科学とはいつでもどこでも繰り返し起こる④ 普遍的なことを取り扱います。

法則性が発見できるとはそういうことです。歴史の上で一回しか起こらなかったことや、ある特定の場所では起こらないことは普遍的ではない特殊なことであり、科学的には無価値なものとして取り扱われます。生物は繰り返しのきかない歴史の中に住んでおり、その土地だけに住み、他のものとは違った存在です。各生物に歴史があり、特定の場所にしか住まないからこそ生物多様性が出てきます。世は科学的に考える時代。そういう時代だからこそ、生物多様性の大切さを理解することが困難になるのです。

(本川達雄「生物多様性」による)

## 資料B

私はよく山に行きます。そこで林業にかかわる人の話を聞きます。

山をいい状態に保つには、<sup>⑤</sup>間伐など適切な手入れをする必要がある。ところが、どの木を切り、どの木を残すか、あと何年すれば、木がどうなっているか、それを見る目を持つ人がいなくなっているのです。

林業の現場では、いろいろ面白い話が聞けます。高知県では木を残す際には、三本単位にするのだそうです。なぜか。

高知県は台風が多い土地です。台風で木が倒れないようにするには、一本に当たる風を弱める必要がある。三本ひとまとめにしていると、どこから風が吹いても、どれかが風上に位置することになって、全体への風が弱まるそうです。三本が一緒に立っているから、木が、そして森林

全体が保たれる。三本がいれば共生していることが強みにつながっているわけです。

これが何を示しているかを考えていただきたいのです。

あちこちで植林されたので、杉だらけの山が増えてしまいましたが、<sup>⑥</sup>本当の山はああいふ姿ではありません。本来は、さまざまな広葉樹の間に杉が立っているというのが、天然の山の姿です。そういう山は色とりどりで、とてもきれいです。赤、緑、黄色が散らばっていて、パッチワークのようです。

いろいろな木があり、その下にはいろいろな生きものがいる。それは、そのほうがお互いにとって都合がいいからです。それで山全体が保っているのです。

人間の都合で木を一本切れば、その下にある土の状態が変わる。また隣にある木への風や日当たりも変わる、すべてが影響しあっています。

「環境が大事だ」ということに異を唱える人はいないでしょう。でも、<sup>⑦</sup>それだけの人が、環境と私たちは一心同体、同じものなのだという点に思い至っているか。本気でそう思うことができているか。

どこかで「自分は自分」「人間は人間」「環境は外にあるもの」と思っていないでしょうか。そういう人が増えたのは、ルネサンス以降の「個人」中心の考え方が幅をきかせてきたからです。「自分」を周囲から独立した存在として立てて、関係を切っていく。周りは全部異物ですから、

⑧ つまるところはマイナスです。

本来、自然と共生できる文化、「個人」なんてなくてもいい社会を私たちは持っていたはずでした。それが、どんどんおかしな方向に進んでしまいました。

かつては言わなくてもわかっていたことが、今では言っても伝わらないようになった。

学生を田んぼに連れて行った際に、

「あの田んぼはお前だろう」

と私は言います。

すると、相手はぼかんとしています。何を言っているのだ、このじいさんは。

でも、田んぼは私たち自身だ、という考えはおかしなものではありません。田んぼから米ができる。その米を体内に入れて、体をつくっていく。米は体の一部になる。その米を作っている田んぼの土や水、そこに降り注いでいる日光も全部、私になっていくわけです。

もちろん海でも同じことです。魚を食べるといことは、海を体内に取り入れていく、ということでしょう。

でも、こういうことを子どもに教える大人があまりいません。「あんたはあんた。田んぼは田んぼ。海は海」としか教えないでしょう。

春先になると、スギ花粉のせいで私は花粉症の症状が出て苦しみ

ます。全国どこの山もスギばかり植えたから、こうなってしまった。なぜ同じ木ばかり植えたのか、もっと自然に合わせたことができただろうに、と言えば、答えは決まっています。

「それでは経済効率が悪い」

おおよそこういうことを言ってくるわけです。多様性が大切だとか、そういう議論をする時、「それでは経済が成り立たない」となる。そういう言い方をしなくても、背景にあるのはその手の思考です。

しかし、「経済が成り立たない」で思考停止してはいけません。

(養老孟司「『自分』の壁」による)

### 〔注〕

① 熱帯……赤道を中心とした一年じゅう暑い地域。

② 寒帯……北極と南極を中心とした一年じゅう寒い地域。

③ 大絶滅……限られた時期に多種類の生物が同時に、滅びてなくなる

こと。

④ 普遍的……全てのものにあてはまること。

⑤ 間伐……森の木を切って木と木の間をあけ、のこした木が早く大きくなるようにすること。

⑥ 広葉樹……ひらたくて、はばのひろい葉をつける木。

⑦ ルネサンス……十四世紀から十六世紀にかけてイタリアからヨーロッパ全体に広まった運動。人間を中心としてとらえる新しい文化。

⑧ つまるところ……結局。要するに。

〔問題1〕

資料A

で、筆者は「生物」の持ちようと「科学」の持ちよ  
うを示しています。二つの違いを百字以内でまとめなさい。

ただし、一まず目から書き始め、記号（、や・や「」など）  
も字数に数えなさい。

〔問題2〕

資料B

の中にある「マイナスです。」とは、どのよう  
な考え方が、また、その考え方についての筆者の意見はどの  
ようなものか、百字以内で説明しなさい。

ただし、一まず目から書き始め、記号（、や・や「」など）  
も字数に数えなさい。

〔問題3〕

私たちが生きていく社会の中で、

資料B

の「思考停止」

してしまっている例を一つあげ、それを変え多様性を大  
切にしていくためにはどうしたらよいか、

資料A

資料B の内容をふまえて、あなたの考えを四百字以上  
四百五十文字以内で書きなさい。

ただし、書き出しや改行などの空らん、記号（、や・や「」  
など）も字数に数えなさい。